



# Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 19

## Study Abroad 2005

英語・英語圏文化専攻 教員

Patricia Yasuda

This year our summer programme was again held in north Wales.

We stayed there for four weeks and spent the final weekend sightseeing in London.

Here are some comments from the students who went:

### The Beatles Story by Sayaka Fukuishi

This summer I went to the UK for the first time. I had a great time. One Friday, we went to Liverpool. I had been looking forward to going there because Liverpool is the Beatles' birthplace. I like the Beatles very much. I went to the Beatles museum. It was exactly what I was hoping for. I was moved to tears by their story. This summer was unforgettable. I hope to go back to the UK some day.

### Home Stay by Yukari Ishikawa

My host family was very funny. There were host mother, her nephew and a little dog. My host mother was like my mother. She taught me a lot of English words which I could not understand at the college. On Sundays, I went shopping with her and to the zoo. I cooked some Japanese food for them but they found the noodles too sour.

### Old Trafford by Erika Maruyama

August 12th was a fantastic day for me because we went to Old Trafford. Old Trafford is Manchester United's ground. I'm keen on football now and I'm a fan of Manchester United. We looked around the pitch, back ground and exhibition. It excited me so much that I bought a team uniform.

### The Theatre by Reika Noguchi

During our stay in London, we went to the theatre. The theatre was beautiful. I felt as if I had entered a film scene. We watched 'Phantom of the Opera'. This is a really powerful musical and the singing and acting was brilliant. Afterwards, I looked at my friend's face and we smiled with tears in our eyes. We had a good time.



マンチェスター・ユナイテッドの  
スタジアムにて



オペラ座の怪人



ホストファミリーとともに

# 英米文学の故郷

## 第18回 ニューステッド・アベイ

英語・英語圏文化専攻 教員

伊藤 知子



ジョージ・ゴードン・バイロン



ニューステッド・アベイ



ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) は、ロマン主義の詩人です。ロンドン (London) のマリルボーン (Marylebone) で生まれました。1798 年、10 才にして、第 6 代バイロン男爵となります。ロンドンの郊外にある名門パブリックスクールのハロー校 (Harrow School) を経て、ケンブリッジ大学 (Cambridge University) トリニティ・カレッジ (Trinity College) で学びました。

ノッティンガムシャー (Nottinghamshire) のレイブンヘッド (Ravenshead) にあるニューステッド・アベイ (Newstead Abbey) はバイロンが相続した所領です。彼はこの邸宅に 1808 年から 1816 年の間にたびたび住みました。私がニューステッド・アベイを訪れたのは、1997 年 3 月でした。広大な敷地の中に元は 12 世紀に建てられた修道院であったという建物が聳え立っていました。大小の池を配した庭園はバラ園、岩石庭園などと呼ばれて美しいものでした。邸宅の中は豪華で、バイロンが使った文机等も残されています。

1809 年から 2 年間、バイロンはヨーロッパの各地を回る旅行に出かけ、その成果として『チャイルド・ハロルドの巡礼』(Childe Harold's Pilgrimage, 1812-18) を出版しました。これは 4 巻からなる旅行記風の物語詩で、1812 年に第 1 巻と第 2 巻が出版されるとバイロンは一躍有名となり、「ある朝目覚めてみると有名になっていた。」(I awoke one morning and found myself famous.) と述べています。美貌で才能があった彼はこの頃からロンドン社交界の花形として女性たちと派手な交際を続けました。そうした中で 1815 年に結婚した妻とは 1 年で離別してしまい、スキャンダルによりやがて世間からも疎外されて 1816 年に永久にイギリスを去ります。バイロンの代表作は『ドン・ジュアン』(Don Juan, 1819-24) ですが、これは風刺物語詩で主人公は彼自身を思わせます。バイロンはヨーロッパ各地を旅行している中で、ギリシア独立戦争に参加しましたが、1824 年にマラリアのため、ギリシアのミソロンギにて 36 歳で亡くなりました。そしてノッティンガムシャーのハックネル (Hucknall) にあるバイロン一族の墓に埋葬されました。

## 留学生座談会 2005

英語・英語圏文化専攻 教員

北川 宣子

派遣奨学生として 1 年間の留学を終えてこの夏に帰国した 2 年生を囲み、今年も座談会を開きました。今回は 5 名がイギリス (Chichester College)、1 名がカナダ (Queen's University) に留学し、体験談を話してくれました。

**教員:** 皆さん、お帰りなさい。今日は留学中の楽しかったことや辛かったことについて聞かせてください。

**渡辺有香 (以下 Y):** 私はクィーンズ大学 (カナダ) で勉強しました。日本では自分と似たような環境の人としか接する機会がなかったのですが、留学して高校生、大学生だけでなく 30 代から 40 代のさまざまな職業の人たちと社会や戦争のことなどを話することができてとても貴重な体験だったと思います。授業以外には会話や映画を楽しむクラブに入っていました。辛かったことといえば、寒い中を歩いて大学に通ったことくらいですね。

**教員:** 歩いて大学までどれくらいかかったのですか？

**Y:** 歩いて 15 分くらいです。特に 1 月から 3 月は -28°C 位の寒い日に大学に通うのはとても大変でした。

**高橋礼奈:** 私も人との出会い、いろいろな人たちと友だちになれたことはとてもよかったと思います。授業以外にもジャズ・バンドに入ること

ができ、また水彩画のコースも取ることができたことで留学生だけでなく、イギリス人と共通の趣味について話すことができたのが嬉しかったです。ただ、最初のホストファミリーが営利主義のような家族だったので、温かい家庭を期待していた私には辛く感じられました。でもそれがあって、家族の大切さやありがたさや人と接する態度について考えるきっかけができ、今はよかったと思います。テスト対策 (First Certificate in English ケンブリッジ検定) (以下 FC) の授業はきつかったですね。

**飯田瑛里:** 私はボキャブラリーを増やすことと表現力をつけることを目標に勉強し、FC を受けました。自分がこんなにいるとできるのだという自信と、毎日をよりいきいきと生活しているという実感が持てました。休みには Sr. Frances (帰国された教員) に会いに行ったり、去年の夏に海外研修でお世話になったウェールズのホストファミリーを訪れたりとても有意義に過ごすことができました。

**井上アレクサンドラ:** 本当に貴重な体験ができたことに感謝しています。どのクラスにもスペイン人が多いのが印象的でした。FCの授業はボキャブラリーの幅も広く、とても大変でした。私はボランティア活動がしたかったので行く前から登録していたのですが、事務手続きがうまく進まず、あきらめました。でも子どもが好きなので、nurseryでの体験ができ、勉強との両立もできてよかったと思います。また、自分で町のチャリティ・ショップを探してアルバイトをし、そこで「ことば」がいかに大切であるかを実感し、その分、大学で頑張っただけで勉強することができたと感じています。

**風間由貴:** 私はレベルが高いクラスだったのでとても不安になり、いろいろな先生に相談したのですが、もう少し頑張ってみようと言われてきました。そのうちに慣れてわかるようになった時はとても嬉しかったです。本当に頑張っただけでよかったと思いました。チチェスターでカリタスの卒業生に偶然会い、その方が以前、アルバイトしていたチャリティ・ショップを紹介していただき、そこで冬休みは毎日のように働きました。友人もたくさん訪れてくれ、様々な国籍の人たちとも触れ合うことができ、とても楽しい毎日を過ごすことができました。朝7時からnurseryでも働くことができました。唯一、ホストファミリーの食事がおいしくないのが不満でした。またresidential houseで働く機会もあったのです

が、その時思ったことはイギリス人はとてもさっぱりしていて、話していて楽しかったです。

**本橋麻里亜:** 私は行く前に学んだ異文化適応についてのゼミがとても役に立ちました。留学するまでは自分の適応能力がどれくらいなのか不安に思っていたのですが、その周期を冷静に考えながら、辛い時には今の自分はこの状態だからもう少しすると楽になっていくと考えながら過ごすことができました。友達もたくさんできました。3ヵ月はホームステイ、7ヵ月はstudent houseと、両方とも体験することができ、よかったと思います。

**教員:** もっと聞きたいことがあるのですが、時間になってしまいました。今日はありがとうございました。皆さん、是非これから留学で学んだことをいかして行ってください。

お昼休みに全員が集まり、互いの留学体験を熱く語ってくれました。今回は1名を除き、5名が同じ大学で勉強したわけですが、それでもそれぞれが異なった体験をし、学び、ひとまわりもふたまわりもたくましく成長してくれたと実感できました。これからの活躍を期待したいと思います。

## 先生が学生だった頃



伊藤知子先生

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのか、学生によるインタビュー形式でお届けします。第19回目のゲストは、英語・英語圏文化専攻の伊藤知子先生です。インタビュアーは、英語・英語圏文化専攻1年生の福石紗也香さんです。

### Q1: 学生時代はどんなことに興味をお持ちでしたか？

A1: 美術に興味を持っていました。もともと美術が好きで、高校時代は美術部に所属していました。大学で西洋美術史という授業があり、歴史的背景や作品の見方について学び、ますます美術というものに惹きつけられていきました。先生もアメリカ人の神父様で魅力的な人でした。課題作成の為にブリヂストン美術館に模写に通ったことがなつかしい思い出です。

### Q2: 英米文学を学ぶ上で心がけるべきことがありましたら、教えていただけますか？

A2: 授業では、多くの作品の中の一部しか読むことができません。興味を持った作品があれば、ぜひ手にとって自分で考えたり、感じたりしてみてください。図書館にもたくさんの作品を揃えていますので、実際に読んでみてほしいと思います。自分なりの考えや感想を持つことが大切です。

### Q3: 影響を受けた作品について伺ってもよろしいですか？

A3: トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』は卒業論でも取り上げましたし、印象深い作品です。この小説と出会ったのはアメリカに留学している時でした。女性の生き方や人間の運命について考えさせられる作品です。『テス』はハーディを研究していこうと思ったきっかけにもなりましたし、何度も読み返した思い出深い本です。

### Q4: 教師を目指すきっかけになったことがありましたら、それについてお話しいただけますか？

A4: 高校でよい先生に出会ったことがきっかけです。英語の先生だったのですが、大変熱心な先生で、授業では手作りのプリントを活用して分かり易く説明して下さいましたし、相談や進路指導も親身になってやって下さいました。その先生の影響で教師を目指すようになりました。

### Q5: 学生の今のうちにぜひやっておいてほしいことというのはありますか？

A5: いい友達関係を築いてほしいと思います。学生時代は、いろいろなことに捕らわれずに相手と純粋に触れ合える時期だと思います。いろいろなことを語り合い、長いこと付き合っていけるような友情を育てていくことが大切です。それが将来の財産になるはずですよ。

### Q6: 最後に何か学生にメッセージをお願いします。

A6: 思いやりを大切に。

# 太平洋を越えた人と文化

英語・英語圏文化専攻 教員

北脇 実千代

先日、愛知県で行われていた万国博覧会「愛・地球博」が閉幕しました。当初は、天候不順もあり予想を下回る入場者数で先行きが心配されましたが、結果として、約2,205万人もの人びとが訪れ、大盛況のうちに終わることになりました。多い日は、一日で約28万人もの入場者だったようです。

この万国博覧会、いわゆる万博も150年以上の歴史があります。第一回の万博は、ロンドンで行われました。1851年のことで、25か国が参加しています。日本の初参加は、1867年のパリ万博でしたが、当時は明治維新前で、正確にはまだ「日本」ではなく、「江戸幕府」「薩摩藩」「鍋島藩」としての参加でした。まさに歴史を感じます。

もちろん、「太平洋を越えた」参加もしてきました。1876年のフィラデルフィア万博が最初です。これはアメリカの独立100周年を記念した万博でもありました。日本は、陶磁器や漆器など工芸品を出品しています。一方、アメリカは電話やマシンなど多くの発明品を紹介したため、日本にとっては新しい技術に触れる場ともなりました。

歴史的にみても、万博は、世界に自国をアピールする重要な場でした。1893年のシカゴ万博への参加では日本も力を入れ、宮大工を一年以上前から送り、京都の宇治平等院鳳凰堂風の建物を日本館として建てたりもしています。アピールすることによって、ある種のイメージが固定化されてしまうという恐れもありましたが、他国の文化や芸術に影響を与えたことも事実でした。その意味で、万博は、参加国が互いの文化や技術を紹介し合い、吸収する場であったともいえます。

参加国の交流という点からみると、愛・地球博には、121か国の参加がありました。これは、前回1990年に大阪で行われた花と緑の万博の参加国数83か国を大きく上回る数です。本学の学生も、参加国のうちの一つ、ブータン館でボランティアとして参加し、ブータンの人びとははじめとしてさまざまな交流を深めることができました。万博は、国と国との交流だけでなく、人と人との交流の場であったことが改めていえるでしょう。

以下は、ブータン館でボランティアをした英語・英語圏文化専攻の学生のコメントです。

## 北田 萌水

万博でのボランティアをもし一言で表現するならば“人との出会い”です。

ブータン館でのお仕事だったので、もちろんブータンの人との交流、そのパビリオンに関わるすべての人たち。ここでは書ききれないほどの出会いがありました。世界各国のパビリオンが一堂にこの万博に集まっているわけですから、英語を話す機会も少なくはありませんでした。一生にもう一度とない、“愛知万博”に参加できてとても誇りに思います。そしてブータン館でのボランティアは、とても興味深いもので、よい経験になりました。



ブータンの民族衣装

## 尾作友里奈

私にとって愛・地球博での経験は、私を大きく成長させてくれるものでした。まず親元を六日間離れ、初めて出会う人達の中で過ごし、またブータンのスタッフの方々との共同生活をしたことで、自分の性格を見つめ直すことができました。そして自分の両親の年齢に近い方たちとお話してきたことも、貴重な体験となりました。

今までほとんど関わることのなかったブータンという国について、今回の機会でいろんなことを知ることができて本当に嬉しく思っています。そしてブータンという国がとても好きになりました。ボランティアに参加することができて本当によかったです。

# Cool Web Site!

英語・英語圏文化専攻 教員 前田 隆子

今回紹介するホームページは、「めざせ100万語！多読で学ぶSSS英語学習法」です。SSSとはStart with Simple Storiesの略で、語彙(数)レベルによって決められた読みやすさのレベルごとの多読用基本洋書が紹介されています。この読書の秋にぜひ皆さんも洋書多読に挑戦してください！

めざせ100万語！多読で学ぶSSS英語学習法

URL: <http://www.seg.co.jp/ss/>

Kaleidoscope 第19号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を [maeda@caritas.ac.jp](mailto:maeda@caritas.ac.jp) までお寄せください。

2005年10月20日発行

発行責任者：北川宣子

編集協力：東京工科大学大学

コンピュータサイエンス学部 塙 竜太郎

## カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>